Osaka University Knowledge Archive

Title	Specific components of child gestures at 14 months are associated with preschoolers' language skills
Author(s)	猪原, 裕子
Citation	大阪大学, 2020, 博士論文
Version Type	
URL	https://hdl.handle.net/11094/77639
rights	
Note	やむを得ない事由があると学位審査研究科が承認したため、全文に代えてその内容の要約を公開しています。全文のご利用をご希望の場合は、大阪大学の博士論文についてをご参照ください。

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

Osaka University

様式３

論　文　内　容　の　要　旨

氏　名　（猪原　裕子）	
論文題名	Specific components of child gestures at 14 months are associated with preschoolers' language skills （14か月児の身振りの特定の種類は前学童期の小児の言語機能に関連する）

論文内容の要旨

〔　目　的　〕

身振りは、他者との相互作用するための非言語コミュニケーション手段の一つである。通常、身振りは１歳より前に現れ、乳児期の言語機能の出現を促進することが指摘されている（Iverson＆Goldin-Meadow, 2005）。身振りには、直示的身振り（Clerkら, 1978; Kita, 2003）、慣習的身振り（Bavinら, 2008）、象徴的身振り（Fenson, 2007）などの種類があるが、どの種類の身振りが言語機能と関連するかについては、報告が分かれている。また、言語機能のうち、受容言語機能・表出言語機能のいずれに関連するのか報告は一貫しておらず、さらに、その関連が乳児期以降でも確認されるかどうか検討されていない（Kraljevicら, 2014; Wattら, 2006; Colonnesiら, 2010）。さらに、身振りと言語機能との関連を交絡する因子があることが指摘されており、社会経済的階層（SES：Roweら, 2009; Mulukら, 2014; Relly ら, 2010）、神経発達水準（Longobaldiら, 2014）が含まれる。これまでに、乳児期における身振りと3歳以降の受容言語機能および表出言語機能との関連を同時に検討し、かつ、交絡因子（SES、神経発達水準）を統制した先行研究がないため、身振りの出現と言語機能の発達との関連は確かなものとはいいがたい。そこで、本研究では、1歳前半（14か月）までに出現する5種類の身振りと3歳4か月における言語機能（受容言語機能・表出言語機能）との関連を、児出生時のSESおよび14か月時の児の神経発達水準を統制して、疫学的に検討した。

〔　方法ならびに成績　〕

対象者は、浜松母と子の出生コホート研究（Takagaiら, 2016）に参加する899名の子どもとその母親816名であった。14か月の身振りの測定には日本語版マッカーサー乳幼児言語機能質問紙（CDI)を用い、5種類（初期のコミュニケーション身振り、やりとり遊び、ものの使用、人形遊び、大人の行為のまね）ごとに定量的に評価し、男女別、月齢別にZスコア化した（平均0、標準偏差1）。3歳4か月における言語機能の測定にはマレン早期学習尺度（MSEL)を用い、受容言語機能、表出言語機能にわけて定量的に評価し、月齢別にTスコア化した（平均50、標準偏差10）。解析には重回帰分析を用い、母の教育歴と出生時の年齢、出生時の世帯年収、14か月の神経発達（14か月にMSELによって測定され、Tスコア化された粗大運動機能、微細運動機能、視覚受容機能、表出言語機能、受容言語機能）を統制した。

その結果、５種類の身振りのうち、「初期のコミュニケーション身振り」「ものの使用」「人形遊び」「大人の行為のまね」の４種類が受容言語機能と表出言語機能の両方に、統計学的に有意に関連していた。一方で「やりとり遊び」は統計学的に有意な関連を示さなかった。

〔　総括　〕

浜松母と子の出生コホート研究における大規模な疫学的検討の結果、14か月までに示される4種類の身振りの得点が高い、すなわち、4種類の身振りが多様かつ頻繁に示されるほど、40か月における受容言語機能・表出言語機能が高いことが示された。この関連は、SESと神経発達水準を統制しても認められた。一方、「やりとり遊び」は、14か月における神経発達水準を統制することにより、2つの言語機能への関連が統計学的に有意でなくなった。乳幼児期の4種類の身振りの出現は、幼児期における2つの言語機能（受容言語機能と表出言語機能）を一貫して予測した。

様式７

論文審査の結果の要旨及び担当者

氏　名　（　猪原　裕子　）		
論文審査担当者	（職）	氏　名
	主 査　教授	高貝　就
	副 査　教授	松崎　秀夫
	副 査　講師	西村　倫子

論文審査の結果の要旨

この研究は、幼児の身振りと言語機能の発達の関連について検討したものである。身振りはこれまで様々な分類がなされており（e.g. McNeill, 1992; Kita, 2002; Iversonら, 1994; Clerkら, 2008; Bavinら, 2008）、Fenson(1993)は前言語期から幼児期にかけての身振りを５種類に分類した。通常、身振りは１歳より前に現れ、乳児期の言語機能の出現を促進することが指摘されているが（Iverson&Goldin-Meadow, 2005）、どの種類の身振りがどの言語機能（受容言語機能・表出言語機能）に関連するのか報告は一貫しておらず、その関連が乳児期以降でも確認されるかどうか検討されていない（Kraljevicら, 2014; Wattら, 2006; Colonnesiら, 2010)。さらに、身振りと言語機能との関連を交絡する因子があることが指摘されており、社会経済的階層（SES：Roweら, 2009; Mulukら, 2014; Relly ら, 2010)、神経発達水準（Longobaldiら, 2014）が含まれる。これまでに、乳児期における身振りと3歳以降の受容言語機能および表出言語機能との関連を同時に検討し、かつ、交絡因子（SES、神経発達水準）を統制した先行研究がないため、身振りの出現と言語機能の発達との関連は確かなものとはいいがたい。そこで、1歳前半（14か月）までに出現する5種類の身振りと3歳4か月における言語機能（受容言語機能・表出言語機能）との関連を、児出生時のSESおよび14か月時の児の神経発達水準を統制して、浜松母と子の出生コホート研究（Takagaiら, 2016）に参加する899名の子どもとその母親816名を対象に疫学的に検討した。14か月の身振りの測定にはFenson（1993）の分類に基づく日本語版マッカーサー乳幼児言語機能質問紙（CDI)を用い、5種類（初期のコミュニケーション身振り、やりとり遊び、ものの使用、人形遊び、大人の行為のまね）ごとに定量的に評価した。3歳4か月における言語機能の測定にはマレン早期学習尺度（MSEL)を用いた。解析には重回帰分析を用い、SES（母の教育歴と出生時の年齢、出生時の世帯年収）、14か月の神経発達（粗大運動機能、微細運動機能、視覚受容機能、表出言語機能、受容言語機能）を統制した。その結果、５種類の身振りのうち、「初期のコミュニケーション身振り」「ものの使用」「人形遊び」「大人の行為のまね」の４種類が受容言語機能と表出言語機能の両方に、統計学的に有意に関連していた。一方で「やりとり遊び」は統計学的に有意な関連を示さなかった。つまり、14か月までに示される4種類の身振りの得点が高い、すなわち、4種類の身振りが多様かつ頻繁に示されるほど、40か月における受容言語機能・表出言語機能が高いことが示された。この関連は、SESと神経発達水準を統制しても認められた。一方、「やりとり遊び」は、14か月における神経発達水準を統制することにより、2つの言語機能への関連が統計学的に有意でなくなった。乳幼児期の4種類の身振りの出現は、幼児期における2つの言語機能（受容言語機能と表出言語機能）を一貫して予測した。

以上より、本研究は、乳幼児における身振りと言語機能の関連について、出生コホート研究の参加者を対象に調査をおこなうことにより、４種の身振りは言語機能に一貫して関連するという新しい知見を得ており、今後の乳幼児の発達の研究の発展に貢献できる貴重なものであると考え、当研究科の学位授与にふさわしいと判定した。